品質・食味の良い「環境にやさしい魚津米」の栽培基準

収量構成の目安

収量構成		目安
㎡当たり最高茎数	(本)	550
有効茎歩合	(%)	70
㎡当たり穂数	(本)	380
平均一穂粒数	(粒)	70
㎡当たり着粒数	(百粒)	266
登熟歩合	(%)	85
玄米千粒重	(g)	22.5

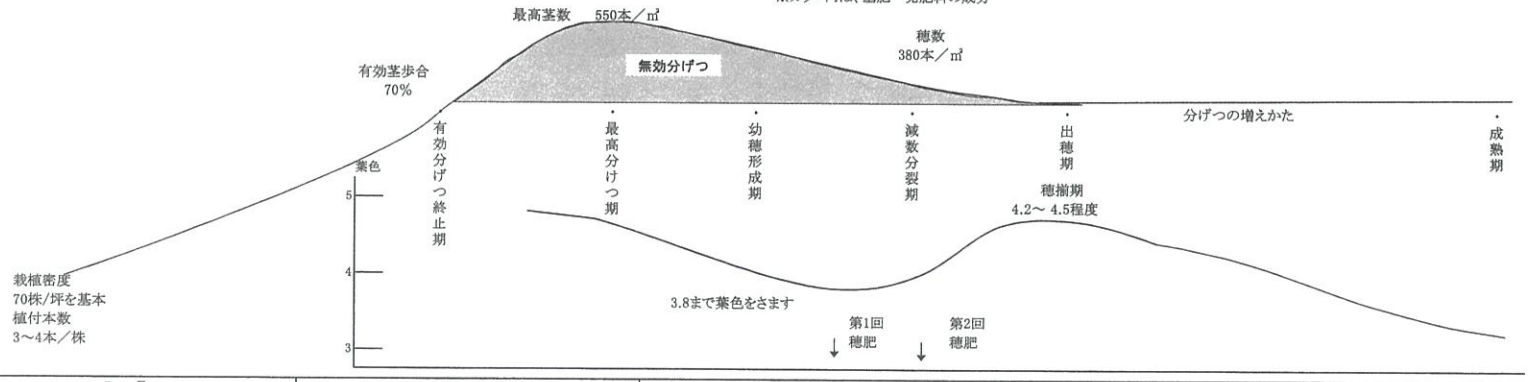
●施肥設計(kg/10a)

		肥料名	全量	耕起前	基肥	中間追肥	穂肥 出穂15日前	穂肥 出穂8日前	成分計 N	成分計 有機N	成分計 P	成分計 K	慣行成分計 N
たい肥		牛ふんたい肥	1,000	1,000	いずれか								
		豚ふんたい肥	1,000	1,000									
		発酵鶏ふん	100～150	100～150									
土づくり資材		シリカバンチF	120	120	いずれか						6.0		
		粒状ケイカル	200	200									
		(苦土重焼燐30)	(20)	(20)							(6.0)		
いずれか 分施	基肥	米有機8号	30		30				1.3	1.1	2.4	2.4	4.0
	穂肥	穂肥有機220	25				10	15	2.2	0.8	0.5	2.5	3.3
基肥一発		有機一発369	40		40				(3.4)	(2.0)	(2.4)	(3.6)	
中間追肥		エスアイ加里らくだ	15			15						3.0	
		計							3.5(3.4)	1.9(2.0)	14.9(14.4)	7.9(6.6)	7.3

※カッコ内は、基肥一発肥料の成分

◎推進内容

- ●たい肥や発酵鶏ふんによる有機物施用による元気な土づくり。
- ●有機質入り肥料の活用により、チッソ成分の化学肥料使用割合を5割削減。
- ●環境にやさしい米づくりの栽培技術の確立と普及。



月日	4月	5月	6月	7月	8月	9月
生育期区分	育苗期 / 田植期 / 活着期	有効分げつ期	無効分げつ期 (6/12, 6/29)	幼穂形成期 (7/14) / 穂ばらみ期 (7/26)	登熟期 (8/7)	(9/17)
水管理	やや深水 / 浅水管理	中干しの徹底	間断かん水 (手溝に水が切れないように管理する)	飽水管理 (足跡に水がたまる程度を維持)	出穂から20日間は湛水状態を保つ	間断かん水 (落水を急がないように)

栽培管理のポイント

- ・一・九㎜のふるいで選別する。
- ・一四・五～一五・〇%の適正水分に仕上げる。
- 適正水分仕上げ・屑米の選別を行う。
- ・適期内に刈取り、刈遅れによる胴割米の発生を防ぐ。
- 籾の黄化率八十五%での適期刈取。
- ・刈取り予定日の五～七日前までかん水する。
- 落水を急がない。
- フェーン時は事前に湛水して、胴割被害を防ぐ
- ・出穂から二十日間は湛水状態を保つ。
- 徹底する。
- ・カメムシ類は、傾穂期・穂揃期の二回防除を
- 紋枯病・穂いもちの防除を徹底する。
- ※一発基肥の場合は化成の穂肥は施用しない。
- ・第二回目の穂肥は、一回目から七日後に行う。
- ・第一回目の穂肥は、幼穂長十五㎜の時期に行う。
- (穂肥有機220を使用)
- 適期に適切な量の穂肥を施用する。
- ・幼穂形成期の葉色は、三・八を目安に誘導する。
- (一〇アール当たり十五Kg)
- ・エスアイ加里らくだの施用。
- 確実に行う。
- ・目標の分げつがとれたら、中干しを遅れないよう
- 過剰分げつを抑制する。
- ・早目に手溝を掘り、水の灌排水の効率化を図る。
- ・かん水は朝又は夕方に短時間で行う。
- 高める。
- ・活着後は浅水管理とし、日中は止め水で田水温を
- 良質の茎を早く確保する。
- ・田植後はやや深水にして活着を早める。
- 浅植えとする。
- ・一株の植付け本数は三～四本とし、三㎝の
- ・荒天時の田植は避ける。
- ・株数は坪当たり七十株を基本とする。
- ・苗箱施薬は慣行どおり行う。
- 適期に田植を行う。
- または有機一発369を四十Kg以内とする。
- ・米有機8号を一〇アール当たり三十Kg以内
- 基肥量は基準量を守る。
- 一〇アール当たり二十一箱程度準備する。
- ・播種量は一箱当たり一二〇g以下とし、育苗箱は
- ・十分に浸種して芽出しを確実に行う。
- うす播きを徹底してよい苗をつくる。